

343) ^{いと} ^{ひと} 愛しき女よ

夏のすべてを置き去りにして ^{あしおと} 跫音もなく秋はすぎてく
^{しゃくじいがわ} 石神井川を吹きゆく風に ^{ひと} コスモスの花かすかに揺れた
暮れなずむ景色の中で ^{ひと} 過ぎし日が心かすめる
もどかしく愛はさまよい ^{ひと} 足早に季節は過ぎる

深まる秋にことば託して ^{まなざ} 君の眼差しふりかえるなら
この ^{いと} 愛しさを心に満たし ^{しゃくじいがわ} ^{さかのぼ} 石神井川を 遡 りたい
コスモスの花のごとくに ^{ひと} 微笑みし白き面影
もう少し君の想いに ^{ひと} ひっそりとひたっていたい

心通わせ心安らぎ ^{さいげつ} ゆく 歳月をとものにできれば
この苦しみもこの哀しみも ^{ひと} 季節が残した思い出になる
秋風を ^{いつく} 慈しむよに ^{たそがれ} 黄昏を歩いてゆけば
すぎし日に君と交わした ^{よぎ} あの ^{ひと} ことば心を横切る

夕焼け空が街と溶け合い ^{とぼり} 夜の 帳 がすべてを包む
真夏の夢ははかなく消えて ^{ひと} コスモスの花かすかに揺れた
哀しくて空を仰げば ^{ひと} 夕月の白くにじんで
^{いと} 愛しさを織りこむように ^{ひと} 静かさとひとつになった